

及兩年、

〔本朝無題詩十〕温泉道場言志

大江隆兼

云名云利兩忘身日々行々口往臻昨翫水城原上月今憐湯寺洞中春呼朋好鳥意同我驚望新花榮
似人尋地適傳前日跡長久年中外祖於此地賦一絕康和年予亦於此地綴六韵故云懷鄉慙口外朝塵琴詩酒處雖成戲佛法僧間
遂仰眞累葉文華相畜得海西弃置是何因

○按ズルニ水城原上云々トアルハ大宰府ノ水城ヲ云ヘルニテ此ニ温泉トアルハ即チ武藏
温泉ノコトナルベシ、

次田温泉

〔類聚名物考 地理三十五〕次田温泉 すいだのいでゆ 筑前 御笠郡

〔萬葉集 六〕帥大伴卿宿次田温泉聞鶴喧作歌一首

湯原爾鳴盧多頭者如吾妹爾戀哉時不定鳴ナハラニナガアシケツハワゴトクイモニコラシヤトキワカメナク

〔類聚名物考 地理三十五〕ゆのはら 湯原 筑前 或云 大和 類字非也

夫木抄

湯の原に鳴あし田鶴は我如く妹にこふれや時わかずなく

今案に伊香保の方言に温泉の流る、河を湯河原といへり、

〔散木弁誦集 悲歎 六〕帥大納言信○經つくしにてかくれ給にければ夢などの心地して○中わざのこ

とはて、かへりけるにすいたのゆのむかひに有ければたちよりてあみんとはなけれど

もあしなどす、ぎけるついでによめる、

悲しさの涙もともにわきかへるゆ、しき事をあみてこそくれ

〔類聚名物考 地理三十五〕赤湯泉 あかゆ

臥遊漫抄治城西南三四里程鐵輪郵側有温泉呼爲赤湯闔十許丈純赤如朱下足便爛能熟生物時

豊後國 赤湯温泉